子連れ式守日常記

鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
子連れ式守日常記

【Ｎコード】
Ｎ４９１５Ｍ

【作者名】
鏡

【あらすじ】
原作とは違い、しっかりしている式守和樹くん。だがしかし、彼は既に「父親」だったのです！毎日がラブラブな彼らの仲に忍び寄る不協和音。そして、彼の子供はどう巻き込まれるのか？

この小説には宮間夕菜アンチが含まれます。アンチが嫌いな方は戻ることをお勧めします。読んでくださる方はキシャーに気をつけて

お読み下さい。

プロローグ（前書き）

この作品は作者のなさ過ぎる文才で書いているため、表現たりねーとか思う作品です。気にしないという方はどうぞお読みください。

プロローグ

朝日が差し込む和室の時計が六時半を指す。

ジリジリジリジリジリジリジリジリ！！！！！

パチン！！

「ふぁぁぁぁ」

けたたましく鳴った目覚ましに反応し、二つ並べてあるうちのひとつの布団から伸びた手が目覚ましのアラームを止める。

掛け布団がめくられて、むくりと横たわっていた身体が起き上がり開口一番に息を吐く。

「うにゅ、うにゅぅ」

目覚ましと少年「式森和樹」の目覚めに触発され、部屋に備え付けられたベビーベットからも小さい唸りが聞こえる。

「おはよう・・千樹」

ベットでまだ可愛く唸りを上げている幼児「式森千樹」を抱き上げてたっぷりと愛情が感じられる声音で挨拶を交わし、そのまま部屋を後にする。

抱き上げたまま板張りの廊下をぺたぺたと進み、２０ぐらいは座れそうな大きなテーブルがある居間にたどり着く。

「おはよう、じいちゃん。父さん。ほら、千樹も」

「おはよぅ〜」

座布団に座って新聞を広げている男二人に挨拶を交わし、千樹も舌足らずな挨拶を交わす。とたんに顔を破顔させ、新聞から目を幼児に向ける。

「「おはよう、和樹。千樹」」

「うん。ばあちゃんと母さんたち、それに千早は台所？」

「ああ、もうすぐ朝飯だろう。」

父さんと呼ばれた男「式森章吾」が居間の鳩時計が六時四十分を指しているのを横目に見ながらそう答える。

そこにちょうど良く台所から声がかかってくる。

「もうすぐ朝ごはんできるから、運ぶの手伝って〜〜」

「それじゃあ。俺が行くよ〜」

腕の中でまた眠りの園に旅立った千樹をじいちゃん「式森宗也」に預けて、居間に続く入口の暖簾に足を向ける。

「今日も千樹はかわええのぅ〜」

「お父さん。あまり揺らし過ぎると起きますから、頬を擦り合わせないでください。」

・・・じいちゃんに預けたのは失敗だったかな～？

暖簾をくぐったとたんに香ってくる味噌や醤油の香りが食欲を刺激してくる。広い１０畳もある台所で味噌汁やお浸しにそれぞれの調理を行っている４人の女性に声をかける。

「おはよう、ばあちゃん、母さん、楓義母さん、千早」

「「「「おはよう、和樹（和君）（くん）」」」」

「和樹、テーブルの焼き物から持って行って」

「了解」

母さん「式森杏」に言われて、テーブルに並べられた鮭の塩焼きをお盆に載せ、居間にもっていく。程よく焦げ目のついた鮭が段々と居間のテーブルに並べられ、お浸しや味噌汁、ご飯も次々に並べれる。

次第に並べれられて、朝食の香りが漂ってきたためか、残りの二人も居間に現れた。

「おはようございます。おじさま、おじい様、義兄さん、千樹ちゃん」

「おふぁよう、父さん、おじいちゃん。それと、和樹に千樹」

「「「おはよう、神代ちゃん、燐音（姉さん）」」」

しっかり挨拶を交わす神代とまだ眠気眼をこすりながら挨拶した燐音もテーブルに着き、台所から料理していた４人も居間のテーブルに着いた。

「それではいただくとするか、冷めないうちにな」

みんなが手を合わせて

「「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」」」

もぐもぐ

ぱくぱく

むぐむぐ

「はい、千樹。いっぱい食べなさい。」

千早がレンゲでニンジンの甘露煮やジャガイモのポタージュを与えていく。小さい口を一生懸命に動かして食べている千樹は保護欲をかきたてる魅力に溢れてるし、千樹をあやしている千早もすごい母性溢れてる。いやー、毎日見てるけどこの一挙一足が幸せを感じられるね。」

「・・・和樹。ぼーっとしてないで、早く食べなさい。片ずくのが遅れるわ。」

「・・あ、うん。むぐむ「それと・・」ぐっ、ん？」

「声出てたから、独り言は自重なさい」

「んぐ!?、んん。」

ひょい

「ん、ごくごく・・・ぷはぁ、あ、ありがと千早」

「・・・うん。」

目の前には耳まで真っ赤になった千早。これって・・・

「あ、あのね。その・・見られて幸せ感じてくれてるのは、うれしいけど、朝からは・・」

「い!?いやいやいや、そうゆうの・・じゃって!?」

はっとあたりを見回せば、

「「「「「24224224224」」」」」

「「和樹も千早ちゃん（お姉ちゃんもお義兄ちゃん）も自重して～、一人身は辛いよ～」」

『わくわくにやにや』と期待するような視線の大人と『見せつけ、見せつけなの!?』と恨みがましく見つめる義姉妹。か、顔に血が上ってくるのが分かる。千早もさっきより幾分か色を落としたがそれでもまだ紅い顔をしてる。

「「こ、こっち見ないで（見ないでよ）ーーーーー!」」

抗議しても変わらずこっちを見つめる視線に顔の熱さが下がらない。

もはや、毎朝恒例となったやりとりが繰り広げられる。この平穏に忍び寄る崩壊はすぐ間近に迫っている。

プロローグ（後書き）

この作品が稚拙なのは作者の表現力～文才に難があるためです。
なので、ご指摘いただけたら幸いです。

さぁ、学校へ行こう

ＳＩＤＥ：千早

みんなのからかいも終わって、ようやく顔の熱さもマシになった。食事のあとのこのまったりできる時間に飲む杏お義母さんのお茶はいつも美味しいわね。確か自分で作ったって言ってたわね・・・くいくい・・・ん？

「まぅま、だっこ～？」

まだふらふらながらも二足歩行で近寄ってきた千樹が私の制服の端をつかみながら、コテンっと首をかしげて抱っこを要求してくる。・・・うん。かわいいわ。だから、お母さんと杏義母さんと落ち着いて、ビデオ回し過ぎ（汗）

「ほぅら、抱っこよ。千樹。」

ゆさゆさ

抱っこしてゆっくり揺らしてあげる。

「きゃー♪」

ふふ、今日も千樹は元気だわ。朝から旦那様と娘の笑顔が見れた・・今日はいいことありそう…

ふと壁にかかった時計に目をやると何時もの登校時間が迫ってる。

「和君、そろそろ行く時間じゃない？」

千樹と離れるのは名残り惜しいけど、ずる休みはダメだもんね

「そうだね、千早。じゃあ、婆ちゃん達千樹をお願いします。千樹、いいこにしてるんだよ？帰ってきたら高い高いしてあげる」

「うにゅ、ぱぁぱ」

私の胸に抱かれた千樹に和君が注意をするが、千樹はいいこだもんね～。

…御義祖父様、千樹がかわいいのは認めますが、フラッシュたいて２０枚連続撮影は止めてください。千樹が嫌がります。

「お願いします、お義祖母様たち。それと義祖父様、自重してください。」

お義爺様に注意をして、笑顔が浮かべたままの千樹をお義婆様に抱き渡す。

「ふふ、まかせておきなさい。いってらっしゃい、それとあなた……いい加減やめな」

ギロリっと、お義祖母さまの眼光一線。さすがのお祖父様もたじろぐ。

「お、おう。すまん、それといってらっしゃい。」

「行ってらっしゃい、和樹と千早ちゃん」

「いってらっしゃい、和樹君、千早をよろしくね」

「もうお母さん……行ってきます」

「行ってきます、爺ちゃん達。千樹お願いね、千早行こう」

「私も行ってきます。御祖父様、燐音姉さん、お母さん。お義兄ちゃんもお姉ちゃんもいってらっしゃい」

「うん。和君、寮の前でまたね」

「了解。待ってるよ」

廊下で別れて、自分の部屋へ。制服に着替えて身嗜みをチェック。うん。寝癖のハネもないし今日もオッケー。行きますか！

部屋にあるゲートを潜って寮の部屋に出る。鞄持って鍵かけて、早く寮の入口に！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和樹

制服に着替えた所で家族と同じに信頼できる声が聞こえる。

「主、行くの？」

真っ白い姿に紅い瞳、アルビノの猫。僕の使い魔「レイン」。

「うん。行ってくるよ。レインは今日出掛けるんだっけ？」

「ええ、ちょっと向こうで幅きかせ始めたオス猫を叩いてくるわ」

「…ないと思うけど、怪我には気をつけてね」

「ふふ、主は心配性ね。わかったわ、気をつける。それと窓は空けておいてね。帰ってくるまで部屋で待機してるわ」

「わかったよ、それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい、千早様によろしく」

レインと別れて、ゲートを潜る。皆、過保護だね。僕も人のこと言えないけど（笑）

寮の部屋に鍵をかけて、外に出ると喪服を着て竹箒で掃除をしてる女性がいた。管理人である「尋崎華怜」さんだ。学校関係者で僕らのことを知ってる数少ない一人だ。

「おはようございます。式森さん、今日も千早ちゃんと待ち合わせですか？」

「おはようございます、尋崎さん。はい、千早を寮前で待ちますよ」

「いつもですが、千早ちゃんは幸せですねぇ。羨ましくなっちゃいます。」

「千早は大事な人ですから、当然ですよ。っと、そろそろ行ってきます」

「千早ちゃん大事にしてあげて下さいね、行ってらっしゃい」
尋崎さんとも結構話込んじゃったから、急がないと。
男子寮から出て女子寮の入口から１０メートルぐらい離れた場所で待機、さすがに女子寮には迂闊に近づいたらマズイしね（苦笑）
っと、着たね。
「和君～、お待たせ」
「さっきぶり、千早。じゃあ行こう」
「うん。えへへ」
ギュッ
…いきなり腕組みですか？朝からは・・・これは・・・
・・・・Ｂ組の反応が不安だが、千早の蕩けた笑顔が見れたし
「まっ、いいか。ほら、千早こうしたらもう少しくっつけられるでしょ？」
ぎゅ～
「う、うん！・・・・・・・あ、ありがとう（照）」
……ヤバイ、朝だけど理性にひび入りそう。

「行こう、来れ以上話し込むと遅れちゃうし」

うん。冷静に言えた俺、偉い。

「うん♪」

さぁ、学校へ行こう（後書き）

この作品が稚拙なのは作者の表現力～文才に難があるためです。
なので、ご指摘いただけたら幸いです。

設定（前書き）

厨ニ病入ってる設定です。

設定

式森和樹（式守）

退魔組織の源流となる一族「式守」の末裔。目立つのをよけるため苗字は式森としている（あんま変わりないかも　汗）。式守家長男。葵学園２年生・１７歳の少年。その体には世界中の偉大な魔術師である先祖達から受け継いだ強大な魔力を秘めており、魔法潜在能力は天文学的数値を誇る。回数は８回。退魔としての腕前は一流であり、亜人並の身体能力に一族秘伝の知識を持つ。戦闘方法は純粋な体術と魔術の混合。魔術は式守が保管している術式から回数消費がないものを使用している。
小学校２年生から外国に留学並びに修行しにいったため、英語・ポルトガル語・ドイツ語も話せる。
　式守の分家である山瀬家の千早と夫婦。ただし、戸籍上はまだ適正年齢に達してないため婚約中となっている。しかし婚約以上の深い仲で、子供もいる。
　苦手なものは祖母たちからからかわれること。弱いものは妻である千早のお願いと子供の泣き顔。

山瀬（式守）千早

　式守分家の山瀬家の長女。１７歳明朗快活で健康的な性格で常時笑顔である。戦闘技能は式守本家の和樹や燐音より劣るが、原作三人娘よりは上（デビル〇シャーの場合は互角）。サポートの技能（ヒーリングや結界など）に優れている。
　和樹とは赤ん坊のころからの付き合いで、４歳のころから「結婚する」「大好き」など好意を和樹にぶつけてきたため、小学校卒業

から許嫁の関係にランクアップ。その後１５歳で
子供を宿したが、家族の反対は無く満場一致で喜ばれた。
　和樹が留学したので当然千早も一緒に行った。そのため、英語・ポルトガル語・ドイツ語も話せる。

式守千樹（女）

　和樹と千早の間に生まれた子供。魔力は千早並みに強く回数は３６９回。ただし、彼女の両親。一族は魔力回数や強さに関係なく愛情を注いでくれているのですくすくと育っている。式守。山瀬両家の大人たちに猫かわいがりされている。両親はまだ学生なので、学校の時間帯は主に祖父母が主に面倒をみている。

式守一族

退魔の源流とされ、数多の退魔の宗家ともいうべき一族。発祥は古く、確認されるだけでも平安時代まで遡る。自身の危険性を考え、争いを避けようとしたため特定の一族を除き外部との関係を絶ったためほとんどの一族には式守のことは伝わっていない。古代から現代に至るまで様々な術や技などを秘匿・保存・伝承してきた。そのほとんどが現代の術師の力では扱えないものであり、弱い術者なら使用しただけで死に至るものもある。
現代では本家と山瀬家、その他一般市民になった家系がある。宗家、分家合わせて家族数は全部で３０程。日本の裏事情に精通していて、古くから国を襲う災厄に対抗してきた。それゆえ国から特別な保護を受けている。
「一つ、式守に不当な扱いをしない。二つ、式守が世間にばれた場合は隠す。三つ、ばらした者には処罰を下す。以上が約束される限

り、式守は国に貢献を誓おう」

式守燐音

式守家長女。22歳でフリーの退魔師として活躍中。「樹雷」という偽名を使っている。少しブラコンが入っていて和樹が家族以上恋人未満に好き。たまに過剰なスキンシップで千早がやきもきしている。風椿葉琉華の親友。

弟である和樹と義妹の千早の娘千樹の名付け親。弟と妹が既に親となったのでちょっぴり焦っている。

?

今日も２－Ｂは（前書き）

クラスメイトの口調難しいですね。どっか変なとこがあるかもしれません（汗）

今日も2－Bは

大きな通りも近くなり視界に僕達以外の学生も増えはじめ、僕達は気恥ずかしさから手を離した。

手は離したけれど、並んで僕達はたわいない会話を続ける。家族のこと、千樹の成長について、勉強の出来具合。

「そういえば、今日は魔力診断日だけど、和君は早退するの？」

「あれ？診断日って今日だっけ？」

「そうだよ、もう。」

「ごめんごめん。そうだね、紅尉先生とはあまり長く一緒にいたくないし…昼休みにぱっと計って放課後は千早が終わるまで図書室で本借りて読んでるよ」

「ふふ、了解。紅尉先生もいいかげんあきらめたらいいのにね・・・それじゃあ、終わったら図書室に行くね」

「うん。待ってるよ。」

「っと、靴履き変えなきゃ」

いつの間にか着いていたんだ。学校・・

玄関で一時的に別れ、B組の下駄箱へ。内履きに履き替えて・・っと肩叩くのは？

「おはよう、式森君」

「おはよう、杜崎さん」

B組では僕と一緒で比較的まともな部類に入る他称「クレイジーズ」の一人。

ついでに言うと、クレイジーズとは常に他人を陥れることや金儲けを考えているB組内では比較的まともな性格で金儲けに関心をあまり持っていない人物である「式森和樹」「杜崎沙弓」「駒野智和」「春永那穂」「數馬秀明」「片野坂雪江」「伊藤　紀久」「柴崎怜子」の8人をさす。數馬秀明は女性恐怖症なので、クレイジーズでも若干浮いているが。

「今日も朝から千早とラブラブね。あー、熱い熱い。今日も天気予報は外れて2℃ぐらい上がってそうね。」

さすがに、言い過ぎじゃないかな？気温上昇なんて・・

「も、もう沙弓は言い過ぎよ。」

「あら、おはよう千早。だって、あなたたち毎日仲いいし、喧嘩してるとこなんて皆無じゃない？それに朝も腕組なんて・・」

「わーー！な、なんで見てるの！？」

なんでって・・・千早、僕たちがいたのは

「・・なんでって、寮の前よ？じょ・し・りょ・うの前！朝にカー

テン開けたら見える位置なんだからしょうがいないじゃない」
ですよねー
「ううっ」
「そもそも、朝からあんなとこであんなことしてた千早たちが悪いの！わかった？」
確かに、全面的に僕らが悪いね。
「ごめんね、もう少し自重するよ」
「うう、ごめんなさい」
・・千早の精神ライフは既にレッドゾーンみたいだ。
「ほら、千早。家に帰るまで頑張ろう。千樹も待ってるんだから・・・」
「う、うん。」
「・・はぁー。式森くんは千早に甘いよ。とりあえず、教室に行こう。もうすぐチャイム鳴っちゃう」
時計を見ると、後5分。
「うわ、ヤバイ！千早もほら早くF組に」
「う、うん。それじゃあ和君も授業頑張ってね」

「了解。仲丸と松田さんが何かしなければ授業も平和だから祈っとくよ」

「あはは（汗）それじゃあ、私こっちだからまた昼休みにね」

「うん。また昼休みにね」

B組前

またかぁ・・・千早と別れてすぐにコレって

「・・・はぁ」

「式森君。ため息つきたいのはわかるけど、いつまでも入口前にいられると邪魔になるから、ほら開けなさい。」

「分かってるよ、わかってますよ！ったく、ア・イ・ツ・ラ～！」

朝の一時にこんなことして、

ガラッ

「おは「「天誅ーー！！」」・・・はぁ」

ボゴンッ「ぐばぁ！！」ドスッ「ゲフゥ！！」

「おはよう、仲丸くん、浮気くん」

掛け声とともに木刀を振りおろしてきたバカ二人「仲丸　由紀彦」「浮気　光洋」にアッパーと正拳をお見舞いし、いつもの怒りがでないようにエ・ガ・オであいさつする。

「「ひぃぃ」」

失礼な。笑顔であいさつしてるんだから、あいさつ変えしなよ。

「怯えるなってのが無理よね」「ですわね」「ぐー」「ですね」

「むぅ、失敬な」

「いえ、怒りが抑えきれてないように見えますから無理ですよ（苦笑）それとおはようございます、式森さん」

「むー・・・彼らが自重してくれれば俺も朝からストレスなんて溜めなくていいんだけどね。それと、おはよう片野坂さん、春永さん、柴崎さん。」

「「おはよう、式森くん。今日もご苦労さま」」「ぐぅ～」

うんうん。あいさつは大事だよね。バカ二人はしなかったけど・・・

「・・・おはよう、式森。今日も大変だな」

「おはよう、駒野。まったくだよ。あんなことするなら、違うことに努力すればいいのに・・」

「・・・確かに。痛い思いをしてないで、金儲けの方法考えていれば利益のある可能性もあるし、式森も朝から大変な思いしてないで

すむのにな」

「だよな、確かに教室が朝から騒がしいと落ち着けない。おはよ、式森」

「おはよう、伊藤。ごめん、朝から騒がしくして」

「いいって、悪いのはあの二人だ」

「そう言ってくれる人がこのクラスに何人いるか（泣）」

うう、このクラスにこの貴重なまともな性格の人材が少数でもいてくれて良かった。なんせ、このクラスは「人の不幸は蜜の味。人の幸福砒素《ヒ素》の味・まず友情から売れ・モテる奴は犯罪者」などを掲げる異常クラスである。また学園の競争制を「他人を蹴落として頂点に立つ」と履き違えており、犯罪すら厭わない（実際1年時の文化祭では違法魔法の行使）。

「うお～い。席座れ～。HR始めるぞ。あとバカ二人はいつまでも床に座り込んでないで席に着け」

「「痛くて動けねぇよ」」

「んじゃ、欠席っと」

「「理不尽だ！！」」

「朝からうるせぇ！お前らが騒いだのが原因だろうが！自業自得だ。」

「だったら、式森もだ！あいつも騒いでたぞ！」「そいだそうだ」

「式森は品性方向で、問題起こさないし、今現在席に着いてるので問題ない。比べてお前らは前科持ちで、現在席に着いてない。以上だ。」

「「・・・」」

今だ床に座ったまま黙った二人を放置してＨＲが始まった。

この二人のずる賢さなら、後で出席簿の日数をいじったり賄賂・・・はしないな、がめついし・・

今日も２－Ｂは（後書き）

読んでくれてありがとうございます。また、９人も登録してくれてありがとうございます。
夕菜たち３人娘はあと２，３話で登場予定です。少々お待ちください。

普遍なる一日？（前書き）

お久しぶりになってしまいました。
この駄作を読んでくださった方、お待たせしました。

普遍なる一日？

１限　世界史

世界の魔法使いの歴史的需要、先生にあてられた仲丸は「何時の時代も金儲けできる魔法」と答えて先生に呆れられてた。次にあてられた柴崎さんは「戦時には治癒術が重宝された」と正解をもらってた。

２限　薬草学

仲丸や浮気他３人が授業の資料で公開された高級資料をパクろうとしたが、バレて罰掃除を言い付けられていた。片野坂さんと春永さんの班が育てた薬草が好評価を受けてた。教本の１．５倍ぐらい育ってた。

そして、現在３限　現代国語

カリカリカリ

自習で配られたプリントを静かにしてる。Ａ４紙３枚の内残すのも後１枚だけ。ちなみに現国の先生は仲丸と浮気を中心としたＢ組とのやりとり（授業の受け答え）のストレスで胃潰瘍を発症し、悪化したため入院中だ。

「ふぅ～」

小さなため息一個ついて教室を見渡せば…なんか違和感。

「あれ？」

これは・・・仲丸？

バッ

以外に大きな声が出て数人が振り返る。ミスったね（汗）

「えーと、仲丸くんの席おかしくない？さっきから動いてないよ」

「「「「何！？」」」」

数人が声を上げながら仲丸の席に視線移す。そこには右手を伸ばしたまま顔を伏せている仲丸の姿があった。

「「「なんだ？何もないじゃな・・」」」

「いえ、これはなんか違うわ！えいっ！」

数人は誤魔化されたようだったが、さすがに松田さんは無理だったみたいだね。松田さんの放った魔法弾が仲丸の頭に命中し、ぽうんと軽音とともに体が爆散した。「やっぱり幻影か、身代りの魔法ね！本人だったら、今のを防御して怒鳴りつけてくるハズだし・・・この時間にある利益になりそうなことは・・・・！３年の検査！？あいつは自分でＢ組法だか作っておきながら抜け駆けね！！みんな行くわよ！あいつに天誅よ！！」

「「「「「おう！」」」」」

松田さんの勢いにクレイジーズ以外が蜂起して、教室を出て行った。

さすが、他人の幸福ヒ素の味のクラス・・

「バカね」「他のクラス移りたい」「ぐ～」「ですね」「・・・一日でもおとなしい日はないんだろうな」「入学してから始めの数日だけだったな」

残った僕たちクレイジーズは毎日の不毛な騒ぎに愚痴をこぼし合い・・・

数分後

ドッカーーーン！！

「ぎょえあぁぁぁぁ！！！」

一階の通路が爆発し、そこからとどろいた断末魔を聞くのだった。

きーんこーんかーんこーん

チャイムがプリントを終わらせてうつらうつらと沈みかけていた意識を上昇させてくれる。

まだ僕たち以外には教室に戻ってきてないみたいだ。

「…ふぁ～ぁ」

「・・・でかいあくびだな、そんなに寝てないのか？」

「駒野・・・昨日は強制的にじいちゃんの酒盛りに付き合わされてね。寝たのは1時ぐらいだったよ」

「・・・それは、ご愁傷？か。このクラスだと体力も精神力もいるからちゃんと休めよ」

「駒野、ありがとう。今日はさっさと寝る予定だし、今から精神的には癒されてくるよ」

「・・・彼女か、俺には縁ないものだな。午後には遅れるなよ」

「ありがと、行ってくる」

心配してくれる駒野に感謝を言って、癒しを求め弁当片手に教室を出て、F組に向かう。

F組に着くと千早たちが机をくっつけてるところだった。

「千早、着たよ～」

「朝ぶり、和君♪」

にっこり微笑む千早、あーB組で受けたストレスがなくなってく…

「あいもかわらずラブ×2だねー」

「石川さん、からかわないで・・・今日もB組で受けたストレスをここで発散させないと、やってられないんだ」

石川映子さん。Ｆ組在籍。千早の友人だが、ことあるごとに冷やかしてくるストレス要因（Ｂ組の与えるストレスの１／１００程度）。

「みたいだね～。これ自販機ででたおまけだけど、あげるよ」

さしだされるのは、栄養ドリンク。鷲のマーク入り。

「・・・ありがとう」

うう、このやさしさが悔しい。あ、目から水分が・・・

「はいはい、和君。辛いのも分かるけど、ご飯食べましょ」

うん。早く食べないとまったりできる時間なくなっちゃうしね。

くっつけた机に座ってお弁当を広げる。彩（いろどり）もきれいでおいしそう。

「それじゃ、いただきます」「いただきます」

「今日もうまい。千早がつくったのはアスパラの肉巻きとポテトサラダでしょ？」

「あたり♪和くん好みの味付けにしたつもりだけど「最初に言ったでしょ？うまいって」良かった～」

その後もたわいない話で精神を癒され、石川さんにおかずをちょろまかされたり・・・やっぱりこうゆう少し騒がしくて落ち着けるような空間ってのが一番癒される。

理科室の用具入れ教室の中で1人の美少女が、耳に手を当て誰かと話をしている。
『念話』と呼ばれる特殊な会話方法である。
しかもその少女の手には日本刀が握られている。

「そんな・・・」

『すべては神城家の為だ。必ず使命を果たせ』

「ですが・・・先輩には・・」

『反論は許さん。お前が一番近いところに居るのだ。それに急がねばならんからこそ、盗聴を覚悟で『念話』で伝えておるのだ。いいな、凛「ま、待って」ブツッ』

その言葉を聞き、凛と呼ばれた女性は、ぎゅっと刀を握り締める。
そこで念話は終了した。

「くぅ・・・・・・」

その後、凛は刀を抜き出し自分の目の前に構える。

「・・式森先輩、早瀬先輩、神代さん・・・・・」

凛はどこか申し訳ないような雰囲気で、その名を呟くのだった。

同じ頃、葵学園の生徒会室の中

「玖里子様、お電話です」

メイドのような女性が、電話機を持ってきていた。
そしてその前に立つのはこの学園の影の支配者、風椿玖里子である。
このような手段を使うということは、盗聴される可能性を警戒してるということだ。
つまりそれほどこの会話は重要であるということを指している。

「何かあったの？」

興味深げに玖里子は電話の相手に向かい話をする。

『はい、実は・・・・・・・・・』

玖里子は電話の相手の話を真剣に聞く。

「なに・・・神城が？」

その言葉を聞いたあと、彼女は学校の二年生の生徒がのる名簿を見る。
開かれたページには1人の男子生徒の写真とそのプロフィールが乗っていた。

「式森和樹、か・・・・・・」

彼女は興味深そうにその少年の名を呟き、その写真をじっと見るの

だった

楽しい昼食後ようやく戻ってきたクラスメートと一緒に授業も無難に（他のクラスでは大問題）過ごして放課後「魔力診断」の時間。

「はい、次の人」

カーテンで仕切られた中に入ると「保健室の主」「学園のマッド」「モノクラー」と名高い紅尉先生が血圧測定の機械に似た装置の前であやしくモノクルを光らせて待っていた。駅前の占い師よりもあやしさに溢れてるのはこの人の人柄だろう。

「式森君だったか、はい腕に巻いて」

「はい。」

「ふむ・・・これでいいとして、君の家の情報が流れた」

「！・・先生、いきなり認識阻害魔法したと思ったら予想外に重大な事態ですね」

「ああ、どこかの探魔士（クラッカー）が葵学園のサーバに侵入して魔力データをばら撒いたみたいで、私もいきなりだったからビックリしたよ」

「・・魔力データのみですか？」

「そうだ。魔力データのみだから君の家系に有名な魔術師がいたことは判明するだろうが、式守という家は知ることはできないだろう。」

「それなら・・なんとか許容範囲内かな？一応祖父にも連絡お願いします。家に帰ってから一族で話し合います。」

「わかった、連絡しておこう。探魔士（クラッカー）については目星はついているから、樹雷に連絡しておこう。」

「お願いします。」

「何、君の家の知識は私にとってとても有益なものだ。喜んで協力するよ。っと、魔力回数８回。変りなしだね。」

「ありがとうございました。」

「では次の人」

ドクター紅尉とは、ギブ&テイクな関係である。とはいっても実家の技術や知識目当てなんでほぼ協力的だけどね～。それにしても、やっかいなことになった・・・始末は姉さんがしてくれるけど、すぐに権力狂いのバカどもが来るのは明白だな。

「はぁ～・・・・図書室行くか。」

結局、今すぐ問題が解決するわけではない。訪れる未来にため息を吐きつつ、足先を図書室に向けた。

普遍なる一日？（後書き）

これから、実習やお盆で忙しくなるので次話は８月の４週目になんとかします。
読んでくださりありがとうございました。

落ち込む夫妻と従者登場（前書き）

遅くなり、お待ちしていた方々すいませんでした！！
今回も駄文ですが、どうぞ！

落ち込む夫妻と従者登場

パラ・・・パラ・・・パラ・・・

カーテンの隙間から洩れる光がゆらゆらと図書室の椅子とテーブルに陽光を注いでいる。その自然な光と蛍光灯の生み出す人口の光がちょうどよい光度になって読書を手伝ってくれる。読んでいる本は医学書。とはいっても医大生が読むような分厚いものではない。素人用の応急手当の本（図解入り）である。

「これはアイツとの場合・・・・この手当はアレを受けた時用・・・・・これはあの薬を服用しながらだとより効果がありそうだ。・・・・っと、これで終わりか。早くも一冊終わったな。時間は、あれから３０分だから・・・だいたい１０分ぐらいかな？なら、雑誌でも見てよ」

さっきまで読みふけっていた本を閲覧棚に戻して雑誌コーナーからファッション雑誌をとってくる。

「さとて、今月の『ｃ○ｏｋｉ○ｈｏ○ｉ』にはめぼしいもの載ってるかな？」

１０ページ

２０ページ

３０ページ

６８ページ

１１３ページ

見開いたページには流行のペンダントや指輪、バックルなど男物の装飾品が鈍く光を反射させているのが写りこんでいる。

「う～ん。今月はちょっと余裕あるし、このタイプのネックレス探してみるかな」

それとも前のページにあったネクタイでシックなカンジにまとめようかな～。姉さんはワイルド系も似合うって言ってたけど…

「う～ん。「和君！」あっ、千早診断お疲れ」

「ううん。待っててくれてありがとう。それにしても、何を悩んでたの？だいたい検討はつくけど（笑）」

さすがに千早にはお見通しだね。まぁ。この状況（ファッション雑誌を広げてうんうん唸ってる）では分かりやすいよね

「千早の思ってる通り・・今月は少し余裕があるから、どれかアクセサリー欲しいなって」

「それなら・・和君はシックなカンジ？それともワイルド？」

「僕はシック系にしたいんだけど・・・そんなにワイルド系って似合いそう？」

卑下しちゃうけど、僕はどちらかといえば童顔気味なんであまり似合うとは思えない。想像するとどっか背伸びしている子供みたいな印象になりそう・・

「そうだね～普段はたしかにシックな感じにまとめるととっても似合ってるよ！ワイルドはあれだね、戦闘の時の雰囲気だとぴったりなんだよ！」

「いや、似合うって言われるのはうれしいんだけど、そんな常時戦闘！って感じに張りつめたら疲れちゃうよ（苦笑）夜だけ・・とか数時間だけならいいけど、普段はシックなものにしてくよ」

「それもそうだね、確かにいつも張り詰めちゃってたら疲れるもんね。でも、数時間ならいいんでしょ？今度、千樹の検診にはワイルドでまとめて一緒に来ない？」

「…千早、ただでさえ僕達が若いことを気にしてる人もいるんだし、完璧に悪い勘違いする人がでるから止めて。行くなら落ち着いた雰囲気の服にしてくよ」

「ふふっ、わかってるよ。私だって変な目線が集中するのは避けたいしね」

舌をチョロっと出して悪戯っぽく笑ってもダメだよ

「ほら、雑誌を戻して帰ろう？今日は少し厄介な報告もあるんだし

…」

はぁ～、ほんと憂鬱。仲丸あたりにこの不幸が行けばいいのに…

「厄介事？」

「うん。歩きながら話すよ。」

雑誌は戻したし、鞄は持った。忘れ物は・・・・なし！

「それじゃ、行こう」

「うん。あ～早く千樹に会いたい。」

「僕も」

思わず重なった思いにお互い微笑がもれる。ハハ、僕達はどっちも親バカみたいだね。

「和君、今親バカって思ったでしょ？」

「あー「思ったでしょ？」…ハイ」

鋭いね（汗）

「別にいいよ…私も思っちゃったし」

「お互い考えることは同じだね」

「そうだねークスクス」

図書館の扉を開け放って廊下にでる。廊下は窓から差し込む西日で橙色に染まって幻想的な雰囲気を醸し出している。

「それで、厄介事って何かあったの？」

「・・うん。紅尉先生からの情報で僕の魔力データを含む葵学園の生徒の魔力データがばらまかれたって。そのせいで僕の家系に有名な魔術師がいたことが判明するハズだよ。」

「・・・それはやっかいなことになったね。近いうちに魔力回数に固執する名家とか来るよね？」

「・・・うん。僕にはもう千早がいるのになぁ・・・ハァ」

「・・・和君。」

少し涙ぐむ千早を安心させてあげるために出たセリフに若干頬が熱くなる。しかし、今後予測される未来を想像したら自然とため息もこぼれてしまった。

「姉さんとじいちゃんにも連絡いってるから、今日帰ってから話し合おう」

「うん・・・・ねぇ、今日は一緒の布団で寝ていい？」

「うん。いいよ。それで安心してくれるなら今日は一緒に寝よう」

「ありがとう」

話を始めてから沈んでいった千早の表情がようやく晴れたものに変

わってくれて、僕もほっとした。どうやら気付かないうちに僕も不安が募っていたみたい。改めて良かった。

橙色の廊下が途切れて、靴箱が並び立つ玄関にようやく着いた。雰囲気もより晴れたものに変わっている。手早く靴を外履きに変えて、再び並び立って校門に向けて歩きだす。隠しきれない焦りのせいか若干競歩のような速さになってしまっている。

校門を越えて、道路に歩きだし・・・

「お待ちください。和樹様、千早様」

声がかけられた。よく知っている声で。

「「リーラさん」」

そこにいたのは北欧系の整った顔立ちにしわひとつないメイド服に身を包ん女性、ＭＭＭ（もっと、もっと、メイドさん）所属、第五装甲猟兵侍女中隊の中隊長『リーラ・シャルンホルスト』だ。

「はい、おかえりなさいませ御二方。大旦那様から連絡があり、迎えに参りました。」

「そんな急に事態が動いているの？」

いつも冷静沈着なリーラにしては焦っているかのように見える。相当事態が急なのか！？

「はい、現在和樹様の寮室に侵入者がございます。」

「「今!?」っ!レインは!?戻ってきてる!?」

「はい、レイン様は式守の実家に戻ってきていると連絡があります。まず車をまわしてきますので、車内で移動しながら詳しい説明をさせていただきます。」

既に所在地などもばれているとは・・・見通しが甘かったかな?なんにせよ、今のところ被害はなし。だけど、楽観視はできないな。

「とりあえず、レインが無事でよかった〜」

「ホントね、被害が最大になったとしても和君の部屋にはあまり物置いてないし、大事なものは実家でしょ?」

「うん。あそこで一番重要なのは紅尉先生からもらった胡散臭い薬ぐらいだね。開けてないけど・・・」

誰が好き好んであんな紫や緑の極彩色などろどろ飲めるか!!北の雪国や願いの叶う町の住人じゃないんだぞ!

「・・アハハ、あれは飲めないよね・・勇気あっても私は無理」

プップー

「・・車も来たし、行こう」

「うん。」

落ち込む夫妻と従者登場（後書き）

今回はあまり話しが進んでません（汗）
今週は週活が明日のみなので、次話は今週末までにアゲできるように頑張ります。

ご指摘、ご意見お待ちしています。

説明とカウントダウン？（前書き）

とりあえず投稿しました。まとめたら、ちょうど良い区切りだったので短くなっちゃいました。

説明とカウントダウン？

ガァーーー

ゆったりしたソファーシート、適度な温度に保たれた車内は快適な空間を作り出している。しかし、車内の空気は若干重い雰囲気が漂っている。

「和樹様、千早さま、ご説明してもよろしいでしょうか？」

「うん。お願い」「お願い。リーラさん」

「かしこまりました。まず、Ｄｒ．クレイから連絡で、葵学園の生徒の個人情報が流出したのはご存知ですね？」

コクッ×２

「その情報はアンダーグラウンド。ネットの海のばらまかれました。幸いＤｒ．クレイが早い段階で気付いたのであまり広くその情報が広がる前に回収、消去が行われました。しかし、若干ながら消去される前の情報が名家や新興の家に流れたのが確認されました。」

「その家の情報はもう集めてある？」

「はい、流れた家が６つ。そのうち行動に移しているのは３つです。家名は風椿、神城、そして宮間です。寮内の侵入者もその三家の者であることが確認されています。」

「風椿は葉流華さんがいるから、事態は直ぐ収拾するけど…神城っ

て凛ちゃんかな？」

「可能性としては1番高いね。葵学園に神城家の子は凛ちゃんだけだし……」

凛ちゃんは本家が嫌だからこっちに着たって言ってたけど、今回の件は本家絡みだろうし荒れてなければいいなぁ

「和樹様、千早様、一つ知らせがございます。」

「…これ以上何かあったの？」

今でもお腹一杯なのにこれ以上のトラブルはゴメンだよ……るー（涙）

「いえ、先程風椿葉流華様のことを申されてましたが、既に燐音様の要請でコンタクトをとりましたが、現在風椿葉流華様は香港に商談に出ており日本にいらっしゃっらないことが確認されました。」

「「ゑ？」」

葉琉華さんがいない？それってつまり…

「「風椿のストッパーがいない？」」

「はい、そうなります。お帰りは早くとも本日深夜になるとのことです。」

「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」」

マズイ！葉流華さんは姉さんの親友だから事情も知ってるし、風椿家からの干渉はひどくならないと思ったのに・・・

「か、和君・・そうなるとマズイよね？」

「・・・うん。長女の麻衣香さんは強引に商談を進めるとか聞いてるからたぶん彼女が五女の玖里子さんあたりを送り込んできたんだと思う」

「はい、和樹様がおっしゃられた通りです。風椿が神城家が動いたという情報を得たため、強硬に送り込んできたようです。神城家は伝統のみでは存続が難しくなり、新しい血を入れることが一族会議で決定していたらしく、和樹様のことが判明したので他の一族に取られる前に行動に移したようです。具体的には先程和樹様がおっしゃられた内容のようです。宮間も、いち早く精霊魔術を導入した名家でしたが、他の家も同じように導入し、最近は落ち目なため同じように大魔道士が生まれる可能性のある和樹様の血を入れるということにしたようです。」

「・・・どの家も僕の都合はお構いなしのようだね（はぁ）」

「まったく！どこの家も和君の都合も関係なしに・・・はぁ・・傲慢だね」

だね。

名家と言われた家は現在ほとんどが落ち目になってきている。栄枯盛衰にあるように、繁栄したのなら次は衰退するだけなのは当たり前である。しかし、高い視線は心地よく一度味わってしまうとなかなか抜け出すことはできない。ゆえに名家はほとんどが衰退しながらも、過去の栄光などにすがって、傲慢なところが多い。

「はい。説明の続きですが、そのほかの3家『杜崎・土御門・ベルディア』は傍観または機会をうかがっているようです。」

・・・ん？杜崎？

「リーラ、杜崎ってクラスメートの・・「はい、杜崎沙弓様のご実家にあたります」なるほど、杜崎さんならそーゆーことには反発しそうだし、事情も知ってるから安心だ」

「そうだね、良かった～」

とりあえず一個問題は解決した。まだたくさんだけど・・・（泣）

「最後に現在の寮内の状況ですが、まず宮間家の者が不法侵入しましし「え！？今朝は鍵かけたよ！」・・鍵に関してはピッキングなどで開けられたようです。「無茶するわね。普通に犯罪よ」まったくです。次に風椿家の者が侵入されました。その後口論となり、発展して魔法の打ち合いになったようです。神城家の方、凛様はそこに尋ねられたようで、自衛のために魔法を使用されているようです。」

「いるって、まだ続いているの！？」

「はい、魔法の打ち合いは１０分ほど前から始まったようです。それと、セレンからの連絡では神代様も凛様と一緒に来ており部屋のものに被害が及ばないように自身も含め防御結界魔法を使用しているとのことです。風椿と宮間の二方は今もなお激しい打ち合いを続けているようです。」

さすがに部屋の高価じゃないものぐらいなら許せるけど、身内（義妹）に危機が及ぶようなことをして許せることではないよね？

「リーラ、寮に向かってくれる？部屋までならまだ許容範囲だったけど、さすがに身内に何かあるなら僕は許せない。神代ちゃんも防御結界はるのが無限にできるわけじゃないし・・・」

「そうだね。神代だったら少なくとも３０分ははってられるけど、二人の攻撃魔法の威力次第では発動時間が短くなる。和君のこともだったけど、神代に何かあったら私も許せない。」

「っ！分かりました。ですが、無理はなさらないようにお願いします。千早様もお気をつけください。」

「わかったよ、リーラ」

「うん。心配してくれてありがとう、リーラさん」

とりあえず、じいちゃんに連絡を入れてどこまで手をさらしてもいいのか確認しとかなきゃな・・・

車内は怒りと悲しみが沸き起こり、重い雰囲気は払拭されたが代わりに黒いオーラが蔓延した。

ところ変わり、男子寮『彩雲寮』

普段なら男子のバカ話や騒ぎで多少うるさいのだが、今日は別の意味でうるさく騒がしかった。何かが強烈にぶつかるような音や鉄砲水が打ちつけるような音など、普段の学生寮では聞くことのない音が響き渡り、老朽化がまだ始まっていない寮に多大なダメージを与えて急激な勢いで寮の寿命を削っている。

ドグゥァ！
ジャババァ！
ドゴォ！
ビキビキビキ！！

音の発生源は2階の一番奥の部屋だが、衝撃が他の部屋にも伝染し窓枠が揺れて1階のいくつもの窓ガラスにはヒビが縦横無尽に入っている。

キキィッ！・・・ガチャチャ

そんな崩壊のカウントダウンが始まっている彩雲寮の前に一台の車が止まり、後部座席の左右から式守和樹と山瀬千早の夫妻が降り立った。

説明とカウントダウン？（後書き）

今回も三人娘とは邂逅ならず・・・現在、三人娘邂逅編を作成中です。
就職活動が激化したので、今月中は厳しいかもしれません。
今月末までに投稿できるようにできるだけ執筆頑張ります。
感想・ご意見お待ちしています。

このキシャー危険につき取扱注意（前書き）

このキシャー危険につき取扱注意

２０分ほど時間が遡る。

彩雲寮　２０１号室

「式森　和樹」の表札がかかっている。いつも物静かなハズのその部屋からは二人の女の子の話声が響いてきていた。

「どこに和樹さんを隠したんですか！？隠しだてすると玖里子さんでも容赦しませんよ！？」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！夕菜ちゃん！私だって知らないわよ！私だって寮に居ると思ったからここに来たのよ？・・・プライベートはさすがに知らないから戻ってくるまではここで私も待たせてもらうわ」

鬼気迫る表情で部屋の主の行方を尋ねる（詰問する）『夕菜』と呼ばれた少女と気押されたまま焦って説明をした『玖里子』と呼ばれた少女の二人が部屋の中央で対峙している。

まぁ、たいして親しくもない人のプライベートまで知っていたのならそれはストーカーの類だろう。しかし、片方の桃色髪の少女は急に表情を険しくすると掴み掛らんばかりに反論する。

「ダメです！！帰ってください！和樹さんには会わせられません！」

「夕菜ちゃんにはそんなこと言う権利も何もないでしょう？」

「あります！妻の私の言うことです！それに私は今日からここに住むんです・・・二人の愛の巣には玖里子さんは邪魔なんです！」

猛烈な勢いで玖里子を追い出そうとする夕菜の腕にはいつの間にか淡い光が集まっていった。魔力が集い、それが姿を変えていく。

「お邪魔虫は退散です！古き神々、世界を司る全ての精霊よ。誓約により我が命に応じん・・・ウンディーネ！」

集めた魔力が水に変わり、蛇のように鎌首をもたげて夕菜の周りに発生した。それを見た玖里子は眉をしかめて懐から符を数枚取り出す。

「宮間の精霊術、くらいなさい！」

「おおっと！」

バサァ
ズオォォォ
ドグァッ！

此水呑水と書かれた符を前方に展開し、迫りくる水流を吸収させた。しかし、符に当たらなかった水流がが玖里子を逸れて壁の一部にぶつかり、表面をはがした。玖里子はさらに懐から符を取り出して夕菜に向かってばら撒いた。

「剪紙成兵（ジェンジチェンピン）！」

符がそのまま巨大化し、手足が伸びて人型になった。符の兵はそれぞれが武器を構え夕菜に突撃していった。しかし、夕菜は若干驚いたもののすぐに先ほどと同等の魔力を集めて詠唱・・

「燃やしつくせ！サラマンダー！」

魔力が燃え上がり、炎をなって襲い来る紙の兵士に群がった。理に従って紙は燃やしつくされ、そのまま炎が玖里子に迫ったが予測していたので一片も掠ることなくかわした。しかし、寮の部屋はそうもいかず素通りした炎が壁に再び直撃し、こんがり壁を焼いた。煤けた壁の一部がまたも剥がれ落ちた。

「やるじゃない！符術は相性があまり良くなさそうね」

「そうですよ、玖里子さん！わかったら、さっさと出てってください！」

「冗談！私だってやられっぱなしで帰るなんて私のプライドが許さないわ！」

「・・そうですか、なら強制的に退場させてあげます！キシャーー！」

「うっわ！！」

新しい火球が奇声とともに形成され、玖里子の胸元もとい心臓に向かって飛来した。しかし、素早い反応でポケットにしこんであった新しい式符を慌てて眼前に展開する。

バキュキュキュッ！！バゴゥバゴゴゥ

魔力と魔力がぶつかり合って摩擦音に似た音が発生し、外れた火球は再び壁にぶつかり寮の耐久度をガリガリと削っていく。

「こっちだって、くらいなさい！！」

「そんなのに当たるもんですか！」

「いいかげんに大人しくしなさいよ！」

「そっちこそいいかげんにぃ！！出て行きなさい！！ウンディーネ！」

攻防は何度交代し繰り返され、夕菜は何度も防がれてどんどんフラストレーションがたまり、込められる魔力もどぎつくなっていく。

魔力回数が１０万を超えているからこそできる無駄打ちである。

先の壁破壊の影響が出始め、床に転がった剥がれた欠片を玖里子は魔法を避ける際に踏んでしまう

「！？い！」

「チャンス！くらいなさい！キィィシャァァァァ！！」

夕菜はその隙を見逃さず奇声を発した。玖里子はゾクゥっと強烈な悪寒を感じ、ヤバイっと感じた時には巨大な火球が発生していた。避けることは無理、避けようとしても体の半分は火球に呑み込まれることを玖里子は長い体感時間の中で感じていた。いわゆる走馬灯である。

《ああ、これは病院で済むかしら?・・・神様》

走馬灯の中では、思い出ではなくこれからの人生で今と同じ玉の肌を取り戻せるのか?であった。迫りくる熱を間近に神頼みで神様に祈った。

バギギギィィ

「え?」「な!?」

神様がほほ笑んだのだろうか?玖里子の眼前には藍色と独鈷杵(どっこしょ)を中心に発生している萌葱(もえぎ)色の二重障壁が巨大な火球を防いでいた。

「・・・先輩方は人様の部屋で暴れるのが常識なのですか?しかも、こんな魔獣相手にでも使うような魔法を・・」

「神城さん・・?とえっと?」

「はぁ、先輩はお礼の言葉も言わないんですか?私は山瀬神代・・・まぁ、私も凛ちゃんもあまり気にしませんけど・・」

のんびりと会話を交わす前方の障壁ではようやく火球が勢いを失い霧散していった。込められた魔力が膨大だったためか、二重の障壁もヒビが入り亀裂をいくつも作っていた。恐ろしい威力である。一人を殺傷するにはありあまる威力があった。目の前の強固な障壁の状態に目をやった玖里子はその亀裂を見て、改めて死の淵に立っていたことを認識し、手先から徐々に震えが体に広がった。

火球を放った張本人は自身が殺人未遂を起こしたのにもかかわらず、いらだたしげな表情を取り繕うともせずに舌打ちをした。それに気付いた神代はいろいろ言いたいことの内、単純な疑問をぶつけた。

「どういうつもりですか？」

「何がですか？邪魔者さん」

「あなたが放った魔法は明らかに殺傷までの威力があった。わかっているのですか！？これは傷害罪を超えている！」

「そうです！あなたが放ったものはＡランクの威力はありました！犯罪ですよ！？」

この世界には魔法による犯罪が絶えないため、Ａランク以上の魔法は緊急時の治療ややむを得ない自衛などの状況以外で発動させた場合犯罪と認定されている。さらに攻撃系の魔法については魔法による傷害罪の発生が年々増加している現状だ。数か月前の国会で『人への攻撃魔法はランクに関わらず犯罪』と改定された。

「・・・何を言うかと思えば、そのようなものは『愛』の前には何も関係ありません！！愛の前には些細なことです。そんなことよりも、あなたも和樹さんを狙う不届き者ですね！食らいなさい！」

さっき邪魔された恨みも込めた巨大な火球が再度夕菜の手に作られ、眼前の泥棒猫（仮）に向けて放たれた。

「まさか・・忠告も聞き入れないとは・・」

「すごい思考回路・・・理解もしたくないけど・・・」

のんびり会話しながらも、再度障壁を張るため制服の袖口に仕込んだ術式に魔力を込めて起動させる。

魔導術式。それは現代で使われている願望のみで発動させる魔法とは違い、複雑な式（魔法陣や古代文字の文章など）に魔力を走らせ発動させる。術式の大きな利点は効果をあらかじめ設定することによる消費魔力回数無しと威力増大、さらに操作の容易が挙げられる。逆に難点には術式を組むには時間がかかることだ。組むのに主流なのは紙だが熟練者では何もない空にも描くことができる。ちなみに玖里子が使用している符術は術式がほぼ形骸化した現代で、わずかに残っている本物の術式である。ただし式守家に伝わるものとは違い、式が簡易になっており威力など効果が低下しているし、回数も消費するので補助程度にしか使えない。

頭上に掲げた右手の上に体に宿る憎悪をすべてつぎ込んだように膨れ上がった火球が形成し終わり、おぞ気の走る笑顔で夕菜が魔力を込めている二人に振り返り、一息に

「死になさい！この泥棒猫っ！！」

右手を振りおろして魔法を放った。放たれた火球は三人に向かって進み・・・

ドゴォォォォン！！

あおの魔法に込められた憎悪に比例するように大きく寮が揺れた。

このキシャー危険につき取扱注意（後書き）

お待たせしすぎてほんとに申し訳ありません（土下座）

仕事も４月に入社してからあまり休みも取れず、約半年で違う事業所に異動することになり、精神的に余裕がとれません（泣き

かと言って泣きごと言っても解決するわけではないので日常を頑張りつつこちらでも投稿を続けようと思います。

すさまじい亀更新ですので、気長に待っていただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4915m/

子連れ式守日常記

2011年11月1日00時11分発行